

入選

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「やさしい行為」

大阪府・大阪聖母女学院高等学校2年 國枝美希

「いち、に、いち、に」

父が玄関までのゆるいカーブの十段ほどを、杖を支えにして一段ずつ足を踏みしめながら登る。

「ふうっ、やっ」と着いたか」

感慨深げに、玄関先で立ち止まった。

「退院おめでとう」

と祖母と叔母が出迎える。父のうしろを、私と母は、スーツケースや紙袋やマジックハンドなどを両腕に抱えて階段を上ってきた。父にとつては三週間ぶりの我が家であった。

ちようど二ヶ月前に医師から告げられた。

「人工の股関節に入れかえるしかありませんね」

七年にわたる単身赴任の生活の無理がたたってか、左足大腿骨がつぶれていた。痛みも相当なものだったらしい。

「難しい手術ですか」

と母は聞く。

「手術自体は三時間くらいですみます。術後、リハビリが必要になってきます。三ヶ月間は脱臼に気をつけて無理な姿勢をしないように。そうすれば、杖なしでも、歩けるようになりますよ」

それから、忙しかった。母といっしょに家の中を確認して回った。

「階段に手すりをつけないといけないね」

と母は言う。

「寝る部屋は、一階にしたらいやん。もちろん、ベッドにして」

「やっぱり、介護用のベッドだね。ボタン一つで背中が起き上がるの。

ほりっ、テレビでよく宣伝してるベッドだ」

と言いなから、一階の玄関近くの八畳間の部屋のドアを開けた。そこは以前祖父が使っていた部屋だった。今は大きな机が一つぽつんとおいてあるだけ。

「ここだと、日当たりもいいし。でも、テレビがくらないと退屈だよね」
「それだと、電気屋さんに頼まなくっちゃ」

と母はメモを取りながら言う。

「そうそう、トイレはウォシュレットにかえないと」

「うわっ、ウォシュレット欲しかったんだ。でもなんで」

「体、ねじつちやだめなんだって」

「ふーん。じゃあ、お風呂はどうするの？」

「あっ、手すりが必要やわ。それから、肘がついている椅子があると便利やわ」

と母は、いそいそと電話をかけたにいつてしまった。

こうして我が家は父にとつて生活しやすく、そしてずいぶんと人に

やさしく生まれ変わったのだった。手すりやベッドなどのハードの面を考えていくうちに、『相手の気持ち思いやれる』『相手の立場になって物事を考えられる』『氣遣いができる』というソフトの面も自然と身につけていったような気がする。

今の私の視点は、父の視線だ。弱い立場にたっている。たえず、もし父だったら大丈夫かと考えるようになった。家の周りや駅周辺を歩いてみると、意外と大きな石や木ぎれやビニール袋などが落ちていることに気付く。今までだったら、素通りしてしまっただが、誰かつまづかないよう、怪我しないようにと脇によけるようになった。

今回の父の病気をとおして、やさしさということについていろいろな面で考えさせられた。父のように病気や障害がある人も、健康な人も、それぞれがやさしさをもって認め合って暮らすことが出来る社会になってほしいと願わずにはいられない。

さあ、今日も父といっしょに散歩にでかけよう。